



TITLE:

英語動詞派生前置詞の共時的・通時的記述研究一文法化への意味論的アプローチ( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

林, 智昭

---

CITATION:

林, 智昭. 英語動詞派生前置詞の共時的・通時的記述研究一文法化への意味論的アプローチ. 京都大学, 2020, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22537>

RIGHT:

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	林 智昭
論文題目	英語動詞派生前置詞の共時的・通時的記述研究 —文法化への意味論的アプローチ—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、<i>considering</i> や <i>following</i> のように、英語において動詞から前置詞へと文法化した「動詞派生前置詞」の体系的な記述と分析を目的としている。全体は 7 章から構成される。</p> <p>序論の第 1 章に続き、第 2 章では文法化研究の背景として、理論言語学、記述言語学、コーパス言語学、伝統文法、意味論、英語語法研究、言語変化、意味変化の研究を概観している。事例を観察・分析する際の基盤となる認知言語学的な言語観、コーパスを用いた量的研究手法を述べた上で、再分析、意味の漂白化、重層化、脱範疇化といった文法化のメカニズム、通時的な言語変化の結果として共時的現象を捉える「汎時性」、意味変化における「主観性」といった主要概念を導入している。</p> <p>第 3 章は、動詞派生前置詞についての先行研究の概要である。現代の英語学を代表する 2 つの文法書 (Quirk <i>et al.</i> 1985, Huddleston and Pullum 2002) における記述を、文法化理論の観点から検討している。その上で、第 4 章から第 6 章で取り組む課題と、各課題に関連する主要な先行研究を概要している。動詞派生前置詞は通時的に異なる起源を持ち、文法化の進行度を示す「脱範疇化」と「意味の漂白化」の程度は事例によって多様である。そのため、共時的に動詞派生前置詞を記述する一方で、個々の事例が前置詞化した通時的プロセスを考察するという方針を掲げている。</p> <p>第 4 章では共時的観点に立ち、動詞派生前置詞の「前置詞性」「動詞性」を、コーパスを用いた定量的手法と英語母語話者の内省に基づく定性的手法により規定している。前置詞性に関しては、Emonds (1976) のテストを援用し、分裂文における生起、強意の副詞 <i>right</i> との共起などについて、英語母語話者の容認性判断による調査を行っている。Corpus of Contemporary American English (COCA) を使用した調査は Fukaya (1997) の主張を支持し、<i>during</i> 以外は関係詞の随伴を起こさないことを示している。動詞性のテストとしては、当該事例の語基である動詞と共起する副詞と動詞派生前置詞が共起するかを、英語母語話者の容認性判断により調査している。文法化の始点である動詞としての性質、文法化の終点である前置詞としての性質を詳細に検討することにより、動詞派生前置詞の文法化の程度が実際には多様であることを示し</p>			

ている。

第 5 章では、4 つの動詞派生前置詞 (*excluding, preceding, barring, respecting*) の通時的变化を記述し、文法化のプロセスを検討している。OED を言語データとし、*-ing* 分詞の品詞的振る舞いを文法化の「脱範疇化のクライン」(Hopper and Traugott 2003) に基づき分類している。(i) *excluding* は、19 世紀頃には動詞派生前置詞 *including* との等位接続がみられており、意味上の主語が明示されない懸垂分詞的な用法が 19 世紀後半より出現し、20 世紀にかけて段階的に前置詞へと範疇が変化したことを明らかにしている。(ii) *preceding* は懸垂分詞的用法をとらず形容詞的用法が大多数を占めたまま現在に至り、20 世紀後半に前置詞化した *following* と対照的であるが、一方で現代英語においては文法化が進行する傾向にあることを指摘している。(iii) *barring* は、分詞由来である *considering, concerning* と同じ文法化の経路を辿ったと仮定した上で、文頭に生起するようになった 19 世紀後半から 20 世紀前半の時期にさらに文法化が進み、前置詞化が進んだことを示している。(iv) *respecting* は、文法化した用法が後期近代英語期に観察されていたが 20 世紀になり減少したことを指摘し、主観化による意味変化の事例と分析している。

第 6 章では現代英語に立ち返り、大規模コーパスのデータにより動詞派生前置詞の生起ジャンルの相違について分析している。イギリス英語については、British National Corpus (BNC) のデータにより *considering, barring, excluding, saving* の考察を行っている。*considering* の前置詞的用法が書き言葉、接続詞的用法が話し言葉に生起すること、頻度が低く周辺的な「除外」の意味を表す *barring, excluding, saving* の文法化した用法が書き言葉として使用される傾向を持つことを指摘している。アメリカ英語は COCA のデータにより、関係詞に随伴する動詞派生前置詞の事例をジャンル別に分類した。ここでも動詞派生前置詞は書き言葉で使用される傾向にあるが、一方で、使用頻度の高い *during, according to* は話し言葉においても使用されている。この推移は、菊池 (2014) で示されている「譲歩」の前置詞 *despite* の変化に類似しており、初期段階では簡潔さが重視されるジャーナリズムの英語（新聞・雑誌）において使用され、その後、話し言葉へも使用範囲が拡張したことを示唆している。

第 7 章は、動詞から前置詞への連続的な変化を議論した各章の分析を総括している。その上で、英語学、言語学、文法化理論をはじめとする関連領域における位置づけを行い、研究の意義と貢献、今後の課題を述べ、結語としている。

## (論文審査の結果の要旨)

本論文は、英語における動詞派生前置詞の文法化に関し、共時的・通時的なアプローチにより詳細に記述を行った研究である。文法化とは、動詞や名詞などの内容語が前置詞や接続詞などの機能語へと一方向的に変化する現象であり、多数の言語において観察される言語変化の特性である。動詞派生前置詞は、このような文法化現象の典型的な事例であると言える。本論文は、Hopper and Traugott (2003), Fukaya (1997), 秋元 (2002)をはじめとする主要先行研究を丹念に吟味した上で個別事例をより包括的に扱い、動詞派生前置詞を体系的に記述することを目的とした論考である。文法化の通時的プロセスに加え、現代英語における動詞派生前置詞の振る舞いの相違や生起ジャンルによる相違を考察対象とした統合的研究である。以下、本論文における共時的分析、通時的分析がそれぞれどのような貢献をなしているかを述べる。

第4章で提示されている共時的分析は、動詞派生前置詞の「前置詞性」「動詞性」の程度を詳細に検討したものである。英語母語話者による容認性判断およびコーパスから抽出したデータを用い、前置詞に特有の振る舞いとして分裂文での生起、強意副詞 *right* との共起、関係詞の随伴に着目し、それぞれの動詞派生前置詞の「前置詞性」を算出している。これらの調査の結果からは、前置詞としてほぼ定着している事例群と、動詞としての性質を強く保っている事例群とが連続的に分布していることが示されており、動詞派生前置詞の文法化の程度差を可視化する試みとして評価することができる。さらに第6章のジャンル別の調査においても、多くの言語変化は話し言葉から始まると言われる一方で、動詞の分詞形を由来とする動詞派生前置詞の場合は書き言葉から話し言葉へと使用域を広げていることを、イギリス英語・アメリカ英語のコーパスにより量的に示している。

第5章における通時的分析は、先行研究で扱われていない4つの動詞派生前置詞 (*excluding, preceding, barring, respecting*) を取り上げ、OED から抽出した事例を脱範疇化のクラインに沿って分類し、意味の漂白化や主観化の点から分析したものである。動詞派生前置詞は一般的に、動詞の分詞形に始まり、主節主語との一致のない懸垂分詞という中間的段階を経て前置詞化したと想定されるが、本章の調査結果からは、*excluding* のように文法化の一方向性に必ずしも合致しないとみなされる変化や、*preceding* のように懸垂分詞としての用法の存在が確認されない事例が存在する可能性が示

されており、動詞派生前置詞の文法化プロセスが一様でないことを示唆する有意義な記述である。さらに*excluding*と*including*、*preceding*と*following*のように対義的な関係にある動詞派生前置詞を対照することにより、文法化のプロセスが事例固有の特性を帯びることを明らかにしている。本研究はOEDを中心とした歴史的資料から大量の事例を抽出し、それぞれの動詞派生前置詞の統語的振る舞いを申請者が個々に判断し分類しており、多大な労力と英語史の知識を要する内容である。そのような点で本論文は労作であると同時に、英語史研究におおいに貢献する知見を提供していると言える。

以上のように本論文はコーパスを用いた量的研究、OEDからの事例観察、英語母語話者による容認性判断といった複数の手法を適用し、動詞派生前置詞に対する多角的なアプローチがとられている。一方で、調査によって対象とした動詞派生前置詞が必ずしも同一ではなく、それぞれの結果を総合的に比較するにはより一貫性のある基準を設ける必要がある。また、容認性判断による調査においても、英語母語話者数を増やし、利用する統語テストをさらに吟味することで結果の妥当性を高めることが求められる。これらの点については、申請者の今後の研究の発展により十分に改善が期待されるものである。

以上、本論文は動詞派生前置詞の文法化に関する記述的な基礎研究であり、文法化研究および英語史研究、英語学研究に寄与する論考として高く評価することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年12月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：      年      月      日以降